

---

# 猫恋

成澤 詩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫恋

### 【Nコード】

N7139L

### 【作者名】

成澤 詩

### 【あらすじ】

雨の日に捨てられた子猫と、拾った人間と、それを囲む猫好きの人達のお話。

別の話が100回を越えたのでその話の平行版を記念に勝手に書きました。

不定期に更新予定。

よろしく願います。

## 1話

(お空から落ちてくるお水は何でしか?)

鼻先に落ちてきた水に子猫は全身が震えました。

(冷たい)

ぷるる、と顔を横に振ります。

(上にあるのは「空」と言うものだとか力様が教えてくれたけど)

いつも見ていた青い空とは違い、ここに来てからの空は青くありませんでした。

力様様の好物の鼠の色です。

ぽつりぽつりと落ちてきて、自分が入っている木箱や身体を濡らすものが『雨』だと言うことは、初めて見た小さな子猫には分かりませんでした。

くっく

自分のお腹が鳴きます。

(お腹さんもお腹がすきましたか? わたしもペコペコだし)

(力様は何処に行ったんでしょうか?)

(兄弟達は帰ってこないでしね)

子猫は母猫から切り離され、兄弟達と共にこの場に捨てられたことを理解していませんでした。

他の兄弟達も同じです。

勇気を出して母を探しに木箱から出た子猫。

お腹があんまり空いて、食べ物を探しに出ていった子猫。

小さい人間に抱っこされて行ってしまった子猫。

残されたのは、この全身真っ黒な子猫のみでした。

(お腹ペコペコでし)

(力力様)

(みんな)

子猫は声の続く限り鳴きました。

もしかしたら力力様が探しているかも知れない。

ミャーミャー

木箱から出た兄弟達が、場所が分からなくなって迷子になっているかも知れない。

ミャーミャー

子猫は一生懸命鳴きました。

自分の鳴き声で場所が分かるようにと。

ぼつぼつ身体に当たる水が、子猫の毛皮を濡らします。

ふわふわの毛が濡れてぴったり身体にまとわりつき、水滴が滴つても

ミャーミャー

一生懸命鳴きました。

その時です。

大きな人間が子猫の首をひょいと掴みました。

子猫はビククリして固まってしまいました。

「やあ、メスだ」

大きな人間は子猫に向かってそう言うと、鞆の中からタオルを取って子猫を包みます。

(メスって……何でしか?)

子猫はそんな疑問が起きるものの、大きな人間の大きな手の中で、タオルにくるまれる温もりに

何故かほっとして

何故か嬉しくて

ニャーニャー

と泣いてしまいました。

## 1話（後書き）

猫エピソード募集！

ついでに外国に行った人、日本にきている外国の方。

日常生活の中で、自分の国と違って驚いたこととかも募集！

良かったらこちらに

「トドのつまった茶室」

<http://utahatodo.blogspot.fc2.co.jp/>

まで！

2話（前書き）

久々投稿。

## 2話

「少し弱ってるね。とても小さいし。生後二週間前後かな？ 一匹しかいなかった？」

子猫を乾かしながら、入念にお医者様は子猫のチェックをします。「はい。見つけた時にはこの子しかいませんでした」

「猫は生来臆病な動物だから、拾われていなければ近くで彷徨いてるかもしれないな」

「……」

「あは、足が短いなあ。マンチカン辺りの混種かな。しばらくうちで様子見るよ。飼うの？」

「日本では“何かの縁”と言うものなんですよ？ 飼います」

「じゃあ、また明日に。容態変わったらこの番号に連絡入れて良いんだね？」

「危ないんですか？」

拾った人間はお医者さんの手の中でミャーミャー鳴きながらジタバタしている子猫を、悲しげに見つめます。

「まだ赤ちゃんだからね。ずぶ濡れだったから熱が出るかもしれないし。先天性の疾患が見つかるかも知れないから まっ、様子見」

拾った人間は「よろしくお願いします」と頭を下げると

切な気な瞳を向けながら、鳴き続ける子猫の頭を優しく撫でました。

\*

子猫は透明の枠の中に入れられても

ミャーミャー

鳴き続けました。

爪で宙を引つ搔くとカシカシと何かに当たります。

(これは何でしか?)

(ここはどこでしか?)

(カカ様)

(みんな)

子猫は怖くて怖くて泣き続けます。

あの大きな人間の大きな手に、ほっとしては、いけなかったんだ。  
だ。

あの手の中から逃げて

箱の中で待つてなくちゃいけなかったんだ。

そうしたら

今ごろ、探しに来たカカ様に会えたかもしれない。

兄弟達が帰ってきているかも知れない。

後悔が、更に恐怖と不安を子猫を覆います。

(カカ様、何処?)

ミャーミャー

(怖いよ怖いよ)

ミャーミャー

カシカシ  
ミャーミャー

透明で囲まれた箱の中

怖くて怖くて不安で

ミャーミャー

泣きました。

その時です。

(うるさい。他の奴等の迷惑だろ)

泣いてる子猫を叱る声。

ビククリして泣き止んだ子猫は、その声の方を向きました。

(ここは動物の病院。他に治療に来ている動物達がいるんだ。静かに寝てろ)

柵から子猫を覗き込む真っ白なのは自分と同じ仲間だと、何となく分かりました。

ぼん

と柵から降りてきた姿は、真っ白で自分より大きくて伸びやかな手足をした猫でした。

子猫は仲間がいたと言う安心からか、ベソをかきながらも話しかけます。

(びよーいんってなんでしか?)

(怪我したり病気になったりしたら治してくれる所だ)

(けがってなんでしか? びよーきってなんでしか?)

(何だよ、それさえも知らないのか。ったく、まあ、まだ豆チビじやあしょうがないか)

(まめってなんでしか?)

(……豆はな、人間の食い物。いずれお目見えする時が来るさ。怪我や病気は『苦しい』とか『痛い』とかがずうつと続いて治らないことを言っんだ。とにかく、そう言っのを治す所だ)

(……よく分かりません……)

(怖いところに思うかもしれないが、俺はこの病院の先生に飼われてるんだ。怖いところに同じ猫がいついてると思うか?)

(……怖くないですか?)

(怖くない。信じる)

しんじろってなんでしか?

子猫は聞こうと思いましたが、白猫の自分を見る真っ直ぐな青い目を見て、意味が分かったような気がして、コクンと頷きました。

(豆チビ、今日はお前は色々あって疲れてる。しかも雨に濡れた。もう寝る。具合悪くなるぞ)

(眠れません。いつもカカ様にお顔をペロペロしてもらって寝まし。

……カカ様にペロペロしてもらえないと寝れません)

カカ様のことを思い出したのか、子猫はまた

ミャーミャー

(カカ様カカ様)

と、泣き出してしまいました。

(ああ、もう泣くな。しょーがないなあ、仕切り越しだけど俺がペロペロしてやるからそれで我慢しろよ)

白猫はそう言うと、仕切り越しに子猫の頬をペロペロと舐めてやります。

(何にもなければ、明日には出れるからな？ そうしたら今度は直にペロペロしてやるよ)

(はい……ねんねするまでいてくれますか?)

(うん。まだチビだからな、おまえ)

そう言いながら、白猫は一生懸命仕切り越しにペロペロ

子猫の頬を舐めてあげました。

子猫は

安心したのか、タオルを抱き締め、大きなお目めをゆっくりと閉じぐっすり寝てしまいました。

白猫は、寝ている子猫を見つめながら元気に育つよう祈らずにはいられませんでした。

### 3話

次の日

子猫は哺乳瓶でミルクを貰っては寝て  
ミルクを貰っては寝て  
を繰り返し

なんの病気にも感染していないことが分かったので、透明な箱から出して貰うことになりました。

(出してもらえたんだ。良かったな)

昨夜の白猫が、子猫の前にやって来ます。

(はい。でも、なんかまた箱の中でした)

今度は籠の中に入れられた子猫は、仰向けになったまま白猫とお話します。

(……どうして腹出して横になってんだ?)

(お腹さんがポンポンです)

うん

ころしょっ

と身体を起こして見せましたが、足が短いせいか、お腹がポッコリのせいか床にお腹がつかえて、また

コロリ

と仰向けになってしまいました。

(……飲みすぎ)

お腹一杯の子猫は、そのままうとうと。  
ネンネしてしまいました。

白猫も子猫の箱の前でくつろぐと、大きなあくびを一つしました。

「おや、レオ。子猫のお守りかい？」

レオの飼い主である動物のお医者様がやって来て、レオと呼ばれた白い猫の頭を撫でます。

ニャー

と同意したようにレオは鳴きました。

「あはは、たまにいるよな、仰向けで寝る猫」

黒子猫の寝相を見て、動物のお医者様は笑いました。

(あんたが飲ませ過ぎ)

レオは突っ込みをいれましたが、人間には猫の言葉は通じません。

大きな空色の瞳で、じっと見つめる飼い猫の背中を撫でます。

「夕方には飼い主になるレオナルトさんが来るからね。それまでお守りを頼むよ」

ニャー

と再び同意したようにレオは鳴きました。

レオは知っていました。

昨夜遅く、この子猫の飼い主になるレオナルトと言う大きなオスの人間が、小さな塊を胸に抱いてやってきたことを。

レオナルトは雨に濡れてビショビショでしたが、胸に抱いた小さな塊を濡らさぬようタオルで巻いていました。

自分の飼い主とヒソヒソ話。

レオナルトから小さな塊を受け取ったレオの飼い主は、奥の部屋へ行ってしまいました。

ぼんやりとその場に立ちすくむレオナルトの眼差しは、とても悲しい光を宿していました。

レオは知ってしまったのです。

レオは動物病院の猫です。

病院の中で起きる嬉しい出来事も

悲しい出来事も

他の猫よりずっと沢山経験しています。

喜ぶ人間も

悲しむ人間も

沢山見てきました。

レオナルトと言う人間の表情はよく分かりませんが、瞳は悲しみ色でした。

ニヤー

レオは彼に声をかけます。

「……やあ」

レオナルトはレオの頭を撫でながら言いました。

「あの子の兄弟……天に召されてしまった……その分、うんと可愛がらなくちゃな……」

レオは知っていました。

彼は

絶対にこの小さな黒猫をとても大切にすることを。

だから彼が迎えに来るまで、レオはこの子を彼の代わりに守ることを決めたのです。

## 4話

「まだミルクに離乳食だから手間かかるよ。トイレの躰もしてないし」

「ほとんど在宅で出勤するの週に一・二度ですからやっていけますよ」

「その出勤日の時、誰か世話してくれる人いる？」

「……いません」

人見知りの無い黒子猫がミャーミャーと自分の手にまとわりつく様子を見て、動物のお医者様は手放せなくなってきたようです。「隣で俺の奥さんがペットホテルと猫喫茶経営していてね。良かったら登録してきたら？ 何かあったら医者俺が面倒見れるって特典付きだから」

それは良い！ とレオナルトは喜び、黒子猫の頬にキスをしキャリーの中に入れ、外に飛び出してしまいました。

「……置いてけよ、子猫……暇だから遊びたかったのに……」

ニャー

(……夫婦揃って猫好き)

レオはお役目ごめんと言わんばかりに鳴くと、もう一欠伸して薄青の瞳を閉じました。

カランカラン

扉を開けるとそこは

「……It Cat」

どこもかしこも猫だらけ。

メゾネットタイプの喫茶は白を基調としていて

窓が大きく天井まで作られていて、良いお天気の時にはお日様の光がサンサンと入り込みそうです。

きっと昼間はそこが猫達の社交場になることでしょう。

人より猫の多い喫茶の中へ入りレオナルトは、店員さんを探します。

「おキヤク様、申し訳アリマセン。ジタクの猫の持ち込みはゴエンリョしてください」

カミカミの日本語で話しかけてきた青年をレオナルトは、じっと見つめました。

その青年もレオナルトをじっと見つめました。

お互い日本では外国人同士。

「日本語分かりマスか？」

青年はレオナルトに尋ねます。

「大丈夫。会話には不自由しない程度には」

(つーか、日本語で聞くか?)

ちょっと線がずれているのか

それともわざとなのか

ニコニコと一片の悪気の無い笑顔で聞かれると、邪な考えは無いとレオナルトは思うようになりました。

「隣の動物病院から紹介されました……。ペットホテルと契約してきましたんです」

「ああ、奥さんね。ホテルはこの奥のトビラ開けて下さい。ちな

みにボク、猫喫茶のヤトワレてる店長してマス、ケイン言いマス」「  
「そうですか。近くに住んでいますから、これから何かとお世話に  
なると思います」

「お世話しませんヨ？ 僕、猫喫茶の店長。ココハ、自宅ノネコ、  
持ちコミ禁止です」

「別にお世話してもらおうとは思っていません。日本の形式な挨拶  
に基づいただけです」

ケインはこの共に外国人でありながら、表情に乏しく、しかも日  
本語が流暢に喋れることを鼻にかけているような話し方にムツとし  
ましたが、日本人の白黒付けない、なあなあ性分だけは、真っ先に  
覚えたので形式に元ずきななああで済ませました。

接客スマイルでニコニコ

レオナルトも彼につられてニコリ

笑顔と言うのは不思議なもの。

交流の円滑材。

これでお互いの第一印象が変わってしまうのですから。

少々きこちなさはあるものの、お互い笑顔で挨拶をして別れまし  
た。

## 5話

ご主人様の名前はレオナルト・マルコなんとか・かんとかと言っ  
長い名前で、わたしにはまだ覚えられません。

ご主人様にユウリと言う名前を付けてもらいました。

お友達のジャンさんが名前の由来を聞いたら

「雑誌から適当に」  
と言っていました。

(雑誌って何でしょうか?)

ユウリと名付けられた子猫は首を傾げながらも、それが美味しい  
食べ物だったら良いなあと思いました。

「もう良いかな? お腹一杯になった?」

空っぽになった哺乳瓶をユウリの口から離します。

「出すもの出しちゃおうね」

レオナルトはユウリを猫トイレの上に乗せました。

只今、ユウリはトイレトレーニング中です。

ちょこんとお手製トイレの砂利の上に乗せられたユウリは(市販  
の猫用トイレは大きくて子猫ちゃんには無理なんです)

暫くご主人のレオナルトと見つめあっていましたが、飽きたのかトイレから出てしまいました。

「今回も駄目かあ……。お腹かお尻をマッサージして出すか……。」「そう考え直し、ティッシュに目をやるとその上にユウリが乗っています。」

「あっ」

と慌てて抱き上げるものの、すでに手遅れ。

ティッシュ箱の取り口に「ご不浄。

ティッシュ箱全滅です。」

「やってくれた……」

ミャー

となくユウリはご機嫌に見えました。

「猫用トイレにしないで、ティッシュ箱の上でしちゃうんですよ」「間違えて覚えちゃったのか、ティッシュの肌触りが気に入ってるのか……」  
動物のお医者様は、子猫の身体を入念にチェックしながら言います。

「便も出ないし……」

「今の猫用ミルクは消化が良いんだよ。五日間くらいは出なくても大丈夫」

「きょうがその五日目です」

お医者様はうぐんと言いながら、お腹を擦ります。

「……あんまり溜まってないけど……肛門刺激してみようか？」

「お願いします」

綿棒にオイルを浸し、お医者様は子猫ユウリの肛門を刺激します。

ニャーニャー

(きゃー！ 何ですか？こちょこちょしまし)

ニャー

(……何だかお腹さんがムズムズしまし)

ニャー

(うゝ)

ユウリの身体が震えだしました。

「あつ、出た」

ご主人のレオナルトに動物のお医者様は大喜びです。

その様子を、机の上で見ていた動物病院の飼い猫のレオは

(あの人間は俺の見立て通りの男だったな)

と

ニャー

と一声ないで再び瞳を閉じました。

## 6話

ユウリの主人であるレオナルトは、日本に来て仕事をしています。石油や天然ガス等、自然エネルギー発掘の技術開発の為に、その大元から抜擢され何年間かの契約で来ています。

自宅で仕事をし、週に一・二度会社に出向いて技術開発の論議を話し合い、形にしようと努力しているのです。

子猫のユウリはまだまだ小さいですし、人間社会の仕組みなんて猫社会には関係ありません。

それでも決まった時間にずっと椅子に座り、黙々と光る四角い枠に向かつては紙に書いてブツブツ呟いているご主人を見て、ユウリは不思議に思いました。

ミヤー

ユウリはレオナルトのズボンにしがみつき、よじ登ろうと必死です。

まだ小さな子猫なので、本来持ち合わせている跳躍をいかした軽やかなジャンプが出来ないのです。

「どうした？つまらない？」

ミヤー

とズボンにしがみつきながら、真っ黒な瞳でこちらを見ながらなくユウリが可愛くてレオナルトは

「しょうがない子だね」  
と頬を緩ませ膝の上に乗せました。

でも、小さい子猫なので机の上の光る物が何なのか、見えません。

（届きません。見えません）

ミャーミャー

（見せてくださいな）

ミャーミャー

（美味しいものでしか？）

ミャーミャー

ぼん

膝からレオナルトの服の上から彼のお腹にしがみつき、ミャーミャーと顔は机の上の物を見ようと必死のユウリの頭をレオナルトは撫でました。

そうして服から剥がし、再び膝の上に仰向けにさせると、お腹から首にかけて

ナデナデ

します。

「もう少ししたらお昼にするよ。そうしたら遊んであげるから良い子におし」

小さいお腹をナデナデするレオナルトの指が、あんまり気持ち良

くて

子猫のユウリは初めの興味も忘れて、ご主人様の指にまわりつ  
くのでした。

## 7話

「さっ、中へお入り」

キャリアにユウリを入れて、レオナルトは外へ出掛けます。

今日は会社の出勤日です。

まだ手のかかる小さな猫のユウリを置いて、会社に出るのがしびない飼い主のレオナルトは、先日契約したペットホテルに予約をしたのでした。

なんせ、予防接種もまだな子猫です。

一部屋一部屋ずつ隔離している所の方が良いだろうし、何かあったらお隣は行きつけの動物病院です。安心できます。

猫は環境の変化に酷く弱い動物ですが、まだ子猫のうちはそうでもないようです。

それでも、大好きなご主人から離れて、随分と狭い箱のお部屋に入れられてユウリは悲しくなりました。

小さなお部屋は端から端まで歩いて、二十歩もありません。

上を見上げれば近い白い壁。大きな窓から見えるお空に浮いている、ふわふわ流れる美味しそうな白い物も見えません。

暫く吊るしてあるオモチャや、床に置いてある、ぬいぐるみで遊んでいましたが、ウキウキしませんでした。

そのうちに眠くなってしまい、瞳を閉じ、そのまま寝入ってしまいました。

ユウリはその真つ黒な瞳を開け、辺りを見渡します。  
おねむから覚めても、殺風景な箱の中。

外を覗くと、自分以外の違う姿をした動物達が自分と同じように  
様々な箱の中にいます。

ご主人様の姿はありません。

探したくても、この箱には柵があり出ることが出来ませんでした。

ミヤー

(ご主人様)

呼んでみても、ご主人のレオナルトはやって来ません。

ミヤーミヤー

(ご主人様、出してください)

黒みのある金髪を揺らし、いつもお空のような瞳で自分を見つめるご主人様は、ユウリが何度も呼んでもやって来てはくれませんでした。

ミヤーミヤー

(ご主人様、ご主人様)

灰色の空

空から落ちてくるお水

寒くて

お腹が空いて

ビシヨビシヨで

寂しくて



## 8話

「聞き覚えのあるうっさい声があるかと思えば、やっっぱチビか。少しは大きくなつたか？」

「チビじゃないでし、ユウリでし」

顔見知りが見れたせいでしょうか？ 途端、ユウリの涙は引つ込みます。

少々おませな切り返しもしました。

「ついさっきまで『ご主人様あ』って泣いてたくせに」

笑いながら言い返され、ユウリは恥ずかしさに俯いてしまいました。

「……だつて……あたし、また一人ぼっちになつたんかと思つて……ご主人様にもう……」

ユウリはまた悲しくなつて

ミャーミャー

泣いてしまいます。

（泣くなよ。ユウリのご主人は、別にユウリを捨てたんじゃない。預けただけだ）

（預け……る？）

ユウリは首を傾げます。

（お前、まだチビだからな。心配だから、こつ言つペットホテルつて言う所で、引き取りの日まで面倒を見るわけだ。今日は会社出勤日で、夜に迎えに来ると聞いたぞ。お前、話を聞いていないのか？）

（聞いてたけど……よく分かりませんでした）

（まだチビだからな）。しょうがないけどさ）

レオは鼻をくんくんさせて、しゅんとしているユウリの顔と自分

の顔をくつつけました。

(ユウリの主人は、ちゃんと迎えに来るよ。心配するな)

(はい……)

(まだ予防接種前だから、外には出れないけど、その後は　ほら、あそこ)

レオが向いた先には、何て楽しそうな遊具が置いてあります。

色鮮やかな囲いの中に、芝のような緑の物が巻き付けている背の高い柱。

そこから別れている枝。

枝から飛び移れるようにしてある壁の出っ張り。

そして床には、潜りがいのありそうな筒に、数種類の爪研ぎ。

フワフワの沢山の鞠に尻尾に毛がない動く小さな動物のおもちや。

他にも色々揃っています。

(うわ〜！)

ユウリの真っ黒で大きなお目めが、キラキラします。

(俺も毎日こっちにきて運動してるんだ。家猫は外に出ないからな)

家猫？

また新たな言葉にユウリは首を傾げましたが、他の、自分と同じように預けられている猫達が遊び出しているのを見て、そっちに意識が行ってしまいます。

(チビも、もう少しあったらあそこで遊べるさ)

(楽しみでし)

すっかり機嫌の直ったユウリを見てレオも一安心。

「こおら！ レオ！」

その時、レオの身体を抱っこしてユウリから引き離れた人間がいました。

ここのオーナーで、動物病院の先生の奥様です。

「お預かりしている子に、ちょっかい出してるんじゃないの。お前は本当に女の子が好きねえ」

ニヤー

（失礼な！ 慰めていたんだぞ！）  
と、レオは抗議します。

けど、それは声だけで奥さんに抱っこされて、背中を撫でられて気持ちが良いのか、ゴロゴロと喉を鳴らしています。

（じゃあな、チビ）

（はい。またでし）

抱っこされたままペットホテルから出ていくレオを見て、ユウリは早くご主人様のあったかい腕の中でねんねしたいと思うのでした。

## 9話

ご主人のレオナルトが、ユウリを引き取りに来たのは、レオと別れて大分たった時間でした。

レオナルトの姿を見た途端、ユウリはもう嬉しくて嬉しくて

ミャーミャー

鳴きながら檻から前足を懸命に出します。

「あらあら、余程寂しかったのかしら？」

オーナーである奥さまが、ふんわりと黒子猫を抱き上げ、飼い主であるレオナルトに引き渡しました。

大きな手を差し伸べる、温かいご主人の腕の中に早く落ち着きたくて、じれったくなくなりユウリは奥さまの手を蹴り上げ、レオナルトの胸に飛び付きました。

「おっと！」

レオナルトは驚きながらも笑いながら、シャツにしがみつく小さなユウリのお尻を押さえ、落ちないよう抱き締めます。

「寂しかった？ ごめんね」

背中を撫でるご主人の手が何てあたたかくて優しいんでしょう。

ユウリはうっとりしてしまいます。

「さっ、帰ろうね」

奥さまから今日一日のユウリの様子を聞いて、代金を支払い終わると、レオナルトはバスケットを出し、ユウリを中に入れようとなりました。

が

ミャーミャー

ユウリは拒絶。

離すまいと爪を伸ばし、必死にご主人のシャツにしがみつきます。

「ユウリ、駄目だよ。中にお入りよ」

レオナルトもシャツから子猫を剥がそうとしますが、爪がしっかりと刺さりはがれません。

無理に剥がすとシャツが破けそうな勢いです。

「あらら」

奥さまも驚いてユウリの前足を掴み、シャツから爪を外そうとします。

「……良いです。このまま帰ります」

レオナルトが、やんわりと制しました。

「人混みの中でパニックにならないかしら？」

「歩いて五分ほどですし。背広で覆って行きます。家に帰れば落ち着いて自然に離れるでしょう」

奥さまに、そうレオナルトは言うのにこりと微笑みました。

子猫を抱いて足早に帰宅したレオナルトは、やれやれと胸に引っ付いたままの飼い猫を胸に抱いたまま、ソファに座り何度もその小さな頭と背中を撫でてやります。

「ほら、もうお家だよ。大丈夫だから爪を引っ込めて。このシャツは僕の婚約者の贈り物なんだ。引っ掻き傷なんか作ったら浮気と間違えられて、僕の顔を引っ掻かれてしまうよ」

分かったのか分からなかったのかは知りませんが、ユウリはクンクン鼻をならし、キョロキョロ辺りを見渡すと

ミヤー

一声鳴いて、ようやくシャツから離れます。

それから降りたそうに下を見てモジモジしているユウリを床に下ろしたレオナルトは、ようやく着替え始めたのです。

(お家でし)

ユウリは部屋中に自分で付けた臭いの後を懸命に嗅いで、ようやく安心したようです。

ミヤー

(お腹さんがペコペコでし)

シャワーを浴びてきたご主人にユウリは、まわりつきます。

「ごはん？ 支度するから待つて」

ご主人様の優しく甘い声音も一緒です。

離乳食に切り替わり、くちやくちやに柔らかくしたご飯を、最初の一口、ご主人が自分の指に付けてユウリのお口に入れます。

ユウリはこの最初の一口がいつとう好きでした。

ご主人様の指の匂いに感触。

いつもお腹や背中、喉元を良い子良い子してくれる、あつたかくて優しいご主人様のお手で。

「今日はいっぱい食べたね」

お皿まで綺麗に舐めたユウリにレオナルトはニコニコして、ユウリの頭をナデナデします。

ミャー

お皿を片付けているレオナルトを呼ぶように、ユウリは鳴きました。

「？」

不思議がつてレオナルトはユウリを視線で追います。

トコトコと短めのおんよで跳ねるように行く先は、ユウリ用のおトイレでした。

「あつ……」

かしかしと粗めの砂を軽くほじると、ユウリはちょこんと座り見事に用をたしました！

後ろ足でかしかしと埋めるような作業を済ませたユウリは、レオナルトを見て

どだ！

と言わんばかりに

ミャー

と鳴きました。

## 10話

夢だ。これは夢だ

レオナルトは寝ている自分の胸の上に座っている、人間の赤ん坊を見てそう思いました。

起きなきゃ　そう思うものの、身動きが取れません。

これが金縛り

レオナルトは初めての経験に少々焦りぎみです。

どいてくれ

懸命に声を出します。

胸の上にいる赤ん坊に声が届いたのでしょうか？

ミャー

と返事をしました。

……ミャー？

「ユウリ……？」

レオナルトはようやく覚醒して、胸の上にちよこんと乗っかり、こちらを覗き込んでいる黒子猫を見つめます。

部屋は闇。

真っ黒なユウリは、闇にまみれてまっくらけ。  
見えるのは、光る目二つ。

それでも闇に慣れてきたレオナルトの瞳は、自分の胸の上でくつろいでいる、自分の飼い猫をはつきりと確認し

はー

と、安堵の息を付きました。

ひよいと持ち上げると無邪気に鳴く子猫に、自分の胸をポンポンと叩いて言います。

「ユウリ、ここは止めておくれよ。うなされるから」

ミャー

「分かってんのかなあ……」

レオナルトは苦笑しつつ、ユウリをいつもの寢床に連れていきます。

浅い果物がごに、よく抜け毛が付いて良いとおすすめのフリースを敷き詰めたユウリ専用のベットです。

「じゃあね、お休み」

ユウリの小さな頭をナデナデして、再び自分のベットに入りました。

やれやれ

小さく息を付き、瞳を閉じると

ミャー

とまた、ベットの下から声がします。

そしてベットに上がる気配。

「……ユウリ」

ミャー

枕元まで来て鳴くユウリ。

そつと手を差し伸べると嬉しそうにスリスリして

コロン

と横になりました。

猫は気分屋です。

しょっちゅうお気に入りの寝床が変わるものです。

ユウリの場合、初めてのホテルでのお留守番が心境の変化を促したのでしょうか？

「……まあ、良いか」

レオナルトは身体をベットの真ん中からずらし、子猫が誤って床に落ちないようスペースを作ると、ようやく眠りについたのでした。

## 10話（後書き）

ムーンで書いている方の執筆の為に、また暫く休載します。

11話(前書き)

お久しぶりです。

## 11話

「レオさん、何か良い匂いしまし」

予防接種の済ませた子猫のユウリは、退屈な檻の中から出て、お泊まりエリアをあちこち回れるようになりました。

なので、ご主人のレオナルトが会社に出勤する日は、とてもご機嫌。

短い尻尾をフリフリし、兄貴分のレオにくつついて回ります。

一匹が好きなレオでありましたが、小さな子猫が自分を慕ってくつつき回るのを邪険にはできませんし、元々知ったかり屋ですから、話すことを何でも感心してくれる子猫は彼にとって格好の相手でした。

今日はレオから嗅いだことのない良い匂いが、ユウリを興味の世界へ誘います。

「食べ物の匂いじゃないでし」

「食いしん坊だな。お前」

呆れながらレオは、自分の身体に付いた匂いの元を探します。

「あつ、これだな」

柔らかな身体を、くにやりと回し、背中を舐めます。

レオの背中には、橙色の小さな小さなお花が、毛と毛の間に幾つか隠れていました。

真っ白な毛並みが雪のようで、そこにポツ・ポツと付いている小さなお花に、子猫のユウリは興味深々。

レオは

ブルン

と一振り、二振り。

小さなお花はレオの身体から離れ、床に落ちました。

それを見ていたのは

預けられていた他の猫達やこの住猫達。

アメリカン・カールのジェニーが、いち早く近付き言いました。

「金木犀だわ。ここの家には沢山植えてるの」

「キンモクセイ……お花ですか？」

「ええ、そうよ。木に咲くお花」

ジェニーはクルンとした耳を一瞬だけ立たせました。

「途中で金木犀の木立を潜ってきたからな。それで付いたな」

それを聞いたユウリはビックリ。

「お家の中にキンモクセイ、あるですか？」

「ねーよ。ここに来る前に庭にいたんだ」

「見たい！ 見たいでし！ 連れてって下さり！」

興奮しておねだりするユウリに、レオは思わず隣にいるジェニーと顔を見合わせています。

ジェニーはまた一瞬だけ巻き耳を立てせ、ユウリを見つめました。

「俺、いち抜けた」

そう言っつてレオが、そそくさとその場を去ろうとした時です。

「レオ。この子はあなたの娘なんですよ！ 自分の子の願いくらい

叶えてやりなさいよ！」

「娘じゃねー！ 妹分！ 血は繋がってねえ！」

おせっかいな性分のジェニーは、それ以上に気の強い猫です。  
雄猫であろうとボス猫であろうと怯むことはありません。

「ジェニーが連れていけば良いじゃん。こいつは預かり猫だから庭には出せないけど、喫茶店からなら見れるだろうし、確か店内にも挿してあったぞ」

「私は嫌よ！」

ジェニーの拒絶にユウリは

ビクン

と、身体がカチコチになりました。

それを見てジェニーは慌てて

「違うの。ユウリのお願いを叶えるのが嫌じゃないの」  
と、ユウリの顔をスリスリします。

「あいつのことなんか無視すれば良いじゃん。いつも言い返すから喧嘩になるんだ」

「それはレオもじゃない。レオは良いわよ、雄猫同士だもの」

「めずらしく。勇み足するんだ、ジェニーも」

ニヤー

とレオは笑うように鳴きました。

「雄猫には雌猫の気持ちが分からないんだわ」

ジェニーがしゅんと頭を垂らそうとしたら

既に先にユウリが落ち込んでいました。

「ごめんなさい……。我が儘言いません。だから喧嘩しないで下さい」

これ下さい

と、レオが払い落とした金木犀の小さなお花を

パクリ

と食わえて、はしっこに陣取って、クンクンと匂いを嗅いでいました。

そのうち寝てしまったようで、規則正しい寝息がします。

「……ちえっ、しょうがねえな。店内に挿してある奴、失敬してくるか」

「最初からそう言えば良いのよ」

口達者なジェニーにレオは言います。

「俺はあんたと違って『あいつ』は嫌いなんだ。だから、できるだけ顔を合わせたくないの」

「私だって嫌いよ!」

「へえ、そう? アマノジャ クジェニー」

シャツ!

歯を剥き出し飛び込んできたジェニーを、レオは華麗な跳躍で避

けると

「襲つお相手お間違いじゃね？」

と、負けずに減らず口をジエニーにたたき、喫茶店へ続く扉をカシカシと爪を叩くレオでありました。

## 12話

カシカシ

曇りガラスの部分に爪を立て

「開けて」

のサインをする猫。

喫茶店側からは真つ白な腹が見えます。

「あ、ケインさん、レオがお店に入りたいようですよ」

アルバイトの女子高生、梨琉ちゃんが胸をときめかせながら、雇われ店長であるケインに話しかけます。

ケインは平日で暇なせいか、自称『本業』と言っている歌の歌詞を考えていました。

良い調子で思い浮かんでいた時に邪魔され、ケインは投げやりに「良いデス。アケテ」と梨琉ちゃんに言います。

「でも……レオは確かゴートイスと目茶苦茶仲悪いですよ？ 今、ゴートイス、喫茶店にいますし……」

「ゴートイス、二階へ連れてって」  
「はあ……」

素っ気ないケイン店長に梨琉ちゃんは少々カチンとしながらも、シルバーの毛並みが美しい長毛猫を抱き上げます。

サイベリアンと言う種類のゴートイスと呼ばれた猫は、猫喫茶の中では唯一、純血統の猫です。

何でも、どこかのコンクールで優勝したとかしないとか。

毛並みも艶々、サラサラ。  
緑のお目めも、ぱっちりキラキラ。  
体型もほどよい筋肉で美しく、また、とても賢い猫でした。  
そのせいか、この猫はこの猫喫茶のボスとなり、喫茶猫達を仕切  
っているわけです。

「ゴートイス。二階で日向ぼっこでもしててね」

了解したのかしないのか

ニヤー

と一声鳴いたゴートイス。

だけど

賢いゴートイス

(これは何かあるな)  
と、尻尾をパタパタさせました。

あゝあ、一波乱の予感。

二階は猫と触れ合いたいお客様達が存分に満喫してもらえるよう  
に、椅子と机は置いていないエリアです。

閉店後は、ここが喫茶猫達の寝ぐらとなります。

二階では何匹かの猫達が、既にうつらうつらとお昼寝タイム。

(降りてこないように閉めといた方が良いかなあ……)

梨琉ちゃんはゴートイスを下ろし、そう考えながら二階のドアの  
ノブに手をかけました。

「AAAー！ もつづるさいなあ！ 開けるヨ！」

一階からケイン店長のイライラ声に

カチャリ

と、ドアが開く音。

「ケインさん、まだ開けちゃ駄目！」

そう梨琉ちゃんが叫ぶものの 手遅れでした。

ほとんど同時に

スルリ

と、喫茶店に入ってきたレオ。

梨琉ちゃんの足元を抜け、階段を降りてきたゴートイス。

鉢合わせです。

## 13話

レオとゴージェイス

視線を合わせたまま、距離を取りつつ、喫茶店の中をグルグル回り、お互いに牽制中。

喉の奥から低い唸り声を鳴らします。

「いや〜ん。鉢合わせしちゃうたじゃない！ ケインさんの馬鹿！」  
女子高校生の直球の怒りを受け、ケインはタジタジしながら  
「デモ、ホラ『喧嘩するほど仲が良い』って言葉があるじゃない？」  
と、言い訳します。

「前の騒ぎ、忘れちゃったんですか！ 二匹が喫茶店内で大喧嘩して、シツチャカメツチャカにしっちゃって！ わたし、夜の十時まで残業して、次の日だってバイト日じゃないのに学校まで休んで片付けに来たんですよ！」

（ケインさんに良いところ見せたいという邪な気持ちもあつたけど）

梨琉ちゃんの気持ちも、全く知らないケイン店長。

「それは、良い経験シタネ」

何だかずれた受け答えに、極上スマイル。

「……脱力」

この人を好きになるの止めようかな？  
ちゃんです。

そんな泣きたい梨琉

それはそうと

レオとゴージェイスは大丈夫？

只今、牽制しながら口喧嘩中。

(何だ、貴様か。毎回やられるのに懲りない奴だな)

(やられた覚えなんか無いぜ。ガキの相手になんかしてられないからな。今回も用が済んだら、さっさと出てくさ)

(ふん、負け惜しみを)

(はっ！ 俺はお山の大将の相手なんかしてる暇無いの。せいぜい、数匹の猫達の前でふんぞり返ってな)

(何と礼儀知らずな！ ここは私のテリトリー。相手のテリトリーに入ったら、早々立ち去るか挨拶をするかのいずれかであろう！

私は貴様に猫社会の常識を教えているだけだ！)

(あなたの常識が世間の常識だと思っなよ。それに、俺としてはさっさと立ち去りたいのに、あんたがちょっかい掛けて引き留めんじやないか)

(何だと！)

フーツ

更に声音が低く低く

お互いの目が逆三角形になってきているようです。

レオは抜け目なく金木犀の挿してある花瓶を見つけ、じりじりと距離を縮めるゴージェイスを牽制しながら、その花瓶に近付いていきます。

ゴートイスが飛び付いてこれる距離までに近付きました。

やばっ！

梨琉ちゃんもケインも

ごくり

と生唾。

(ジェニーと会ったか?)

レオの以外な台詞に、ゴートイスは

ピクリ

と、動きを止めました。

その隙にレオは

ピヨンとテーブルに飛び乗り、花瓶に挿してある金木犀を口にくわえます。

(貴様！ ジェニーと会っておるのか？ あやつ、今どこに居る！)

(さあね)

レオの思わせ振りにゴートイス、とうとう大沸騰！

ギイニヤア！！

(貴様！！)

金木犀を口にくわえ、逃げるレオをゴートイスは追いかけて回します。

テーブルからテーブルへ  
その度に花瓶を落とし  
ランチョンマットを払い  
椅子を蹴倒します。

そして

暴れると最も被害の大きいカウンターへ。

「こつち来ンナ！」

ケイン店長の身体を張った必死のブロックに、レオとゴージェイスの顔面飛び蹴り。

レオがペットホテルのドアに向かって知っているのを知った梨琉ちゃんは、先回りしてドアを少し開けました。

猫ですから

少しの隙間があればするりと抜けれるでしょう。

それにレオはスリム猫。

ゴージェイスの方が毛並みも立派ですが体型も純血腫なせいなのか、がっちり見事です。

(レオが抜けたら即行ドア閉め！)

そう、決意しタイミングを図っていましたが

ゴージェイス

思ったより遙かに頭が回りました。

「キヤア！」

ジャンプして、梨琉ちゃんの頭にダイブ&キック。  
驚かせてドアを閉めるタイミングをずらしました。

(逃がさんぞ、レオ！)

捕まえてコテンパンにして、ジエニーの事を白状させてやる

滑る勢いでドアを抜けた先には

真っ黒黒な子猫が一匹。

## 14話

（ 子猫！ ）

ゴートイスは前足にめい一杯力を込め、踏ん張り、身体を後ろに反らします。

しかし、あまりに勢いを付けすぎたために止まらず、ユウリを弾き飛ばしてしまいました。

コロコロコロ

軽い子猫は、三回ほど床の上を回転。

目を回しながらも起き上がりましたが

（クルクルしまし）

とヨタヨタと千鳥足で歩くものですから、そのまま壁へ

ゴン

とぶつかってしまいました。

おネンネから目が覚めたユウリは、ジェニーから

（レオが金木犀を持ってきてくれる）

と聞き、大喜びだったんです。

短い足をスキップさせ、ドアの前で待っていたんです。

なので

ジェニーも横にいたんですね。

ジェニーは、レオが飛び込んできた段階で素早く避けたんですがユウリは、ビックリして固まってしまったんです。

壁にぶつかり、しばらく動かないユウリを見てビックリしたのは猫達だけではありません。

人間達も然り。

(他所様の猫だよ〜！)

ケイン店長に梨琉ちゃん。

それに騒ぎを聞いて駆けつけた奥様でした……。

「申し訳ありません！」

動物病院の先生に、その奥様。

ケイン店長とアルバイトの梨琉ちゃん。

四人に頭を下げられ、子猫のユウリを両手に抱えたレオナルトは、冷や汗を掻きます。

話を聞けば、軽く壁に頭をぶつただけのようだし、すぐに起き

上がったと言っじゃないですか。

それに今、自分の腕の中にいるユウリはとっても元気です。

「どうか頭を上げて下さい。大したことは無いようですし。猫だつて集えば何かしら衝突はありますよ」

「しかし……」

「これからもお世話になるのですから」

困り顔の奥様の手を握りレオナルトは、やんわりと微笑みます。

「……まあ……。でも、このままでは……。そうだわ！今度のお預かりは無料とさせていただきます！」

にこり

レオナルトの満足な交渉の更なるスマイルに  
奥様だけではなく

梨琉ちゃんまで頬を染めました。

（ゲキテキメン・イケメンスマイル！）

（爽やかな笑いに、ネチネチしない性格！ しかも頭良さそう！）

梨琉ちゃんの脳内映像には、白馬に乗ったスーツ姿のレオナルト。

（ずれてるケインさんより良くない？）

すなわち梨琉ちゃんは

惚れっぼくって

外人好き なようです。

「……あの、話は変わりますが」  
「はいっ！」

自分に尋ねられた訳じゃないのに、思いつきり元気に返事してしまつた梨琉ちゃん、今度は恥ずかしさに頬を染めました。

レオナルトは先生に尋ねました。

「この子、<sup>ユウリ</sup>ずっと枝にかぶり付いたまま離さないんですが……大丈夫ですか？」

レオナルトがユウリの口から枝を取ろうとすると、顔を横に振り、更にかつしりくわえるで

「ささくれた枝とか、喉や胃に刺さりませんか？」  
と、心配なのです。

## 15話

「たっだいま〜。ロディ！」  
梨琉ちゃんは帰ってくるなり、飼い猫のトラ猫ロディに抱きつきました。

ニヤー

(何だ何だ?)

ロディはウザそうに横に尻尾を振ります。

夢見がちに潤む飼い主の瞳に、ロディは嫌な予感がしました。

「今日ね、とおおおおおっても素敵な人に会ったのお！」

(やっぱり……)

人間だったら溜め息を付くところでしょうか。

「レオナルトって言う名前で〜。背え高くつてえ、ちよつと濃い金髪？かなあ？ 青い目で〜。笑顔がとおおおつても、とおおおつても素敵なの！」

ニヤー

(名前が変わる以外、好きになる相手の特徴に変化無いよな、梨琉は)

「素敵な予感がするのよ〜！ 今度こそ間違いない気がする！ わたしの運命の人かも！」

ニヤー

(ケインっつーのはどうしたんだか)

「ロディもそう感じる？ レオナルトさんって、どこことなく品があつてね、スーツもブランド品みたい。安っぽい光沢無かったもの。どこの国の人かなあ？ 実は貴族の血筋だったりして！ それでわたしは……」

日本の女子高生と貴族の末裔で由緒正しい生まれの彼。勿論、わたしは未成年だから彼はわたしが成人するまで、キス止まりですつと我慢してくれるジェントルマン。

でも、彼のご両親がわたしと彼との交際を猛反対。

何とか引き裂こうとするのを彼は必死に説得を続けるの。

でも、一族の長老とか言う強い権限を持つお祖父様が出てきて彼に試練を与えるんだわ。

ニヤー

(その設定、出てくる男の名前以外全く変わってないよ)

ケインの時は思い込みが珍しく長持ちしたのにな。

ニヤー

(あっ、告ってないからか)

ロディは自分を抱き締め、まだ妄想を展開している自分の飼い主の梨琉ちゃんを見上げます。

(惚れっぼくって、のぼせやすく、自分に優しい奴にはすぐフラフラ付いていくからなあ……。それで、いつもフラれるんだ)

見た目はベビーフェイスで可愛いタイプの梨琉ちゃん。

どうも、恋愛事情には頭のネジがぶっとんでしまおうようで……。妄想激しくて、現実のギャップに突然気付き、一人でしょげたりそのまま相手に突っ込み、撃沈。

そればかり。

その都度ロディは、メソメソと泣く梨琉の涙を拭うタオルとなるのです。

（また、今回もタオルとなるかもな〜）

そう言う勘はよく当たるロディ。

猫天気予報並みによく当てます。

（ま、仕方ないか。俺だけだしな、こつこつ役割してやれるの）

そう思い、ロディはニャーと鳴きました。

## 16話

「金木犀の枝をなかなか離してくれなくて、大変だったよ。もう、花が取れちゃってるのに」

夜も更け、レオナルトは日課となっているスカイプで、ブラウン管の向こうにいる婚約者のオリガと話し込んでいました。

「面白い猫よね、テレビが好きだし、花の匂いが好きだし。ユウリちゃんのプレゼントはマタタビ止めて花の香水にしようかしら？」

ブラウン管の向こうで喋るオリガにレオナルトは  
「どちらでも良いよ。でも、どっちも日本でも買えるよ？」  
と言いました。

「じゃあ、約束通りのGPS付きの首輪だけにするわ」  
「うん」

「女の子だから可愛いデザインにしたのよ。赤の皮地にダイヤを均等に埋めたの」

「へえ……………えええ！ダ、ダイヤ！？」  
椅子から立ち上がるほど驚いているレオナルトに向かって、オリガは「そうよ」と不思議そうに答えました。

「ジルコンとかじゃなくて？本物の？」  
「当たり前じゃない。貴方と結婚したら私の猫にもなるのよ？首輪の上になる部分を ほら！貴方に買った婚約指輪のハートのピンクダイヤとお揃いにデザインしたのよ」  
と、左の薬指に輝く婚約指輪をレオナルトに見せます。

二カラットのハート型のピンクダイヤに囲む小さなダイヤ。

猫の首輪にも……………。

(…………結構したのに…………)

レオナルト、目に見えて落ち込みました。

梨琉ちゃんの予想が外れたわけではありませんでした。

レオナルトも国に帰ったら、裕福な地域に住むそれなりに裕福な家庭に育ちました。

一般市民ですが。

しかし

婚約者のオリガの家庭は、正真正銘のセレブ。

お母様は北のお国の貴族の血をひいているそうです。

お祖父様は会社の会長。

お父様は社長。

ご本人様は雑誌のモデル。

きらびやかなご家族に一族様です。

しかし、どうやって二人は出会ったのか？

レオナルトも母親の希望で、小さい頃からモデルをやっていたんですね。

その繋がりでオリガとは知り合いました。

当時はモデル仲間としての、まあ、会ったら他のモデル仲間達とお話する程度でした。

だけど成長して、他にやりたいことを見つけたレオナルトは、モデルの仕事をきっぱり辞めて、大学で勉学に励むことにしました。

そんな時、オリガから電話がありました。

『私と仕事するの、そんなに嫌なわけ？』  
と。

最後に断った仕事と言うのが、彼女と組んでの仕事だったんです。

ケンカ腰の彼女と電話越しにじつくりと誤解を解きつつ話し、親交を深めたのがお付き合いのきっかけでした。

婚約するまで、やはりと言うか、オリガ側の一族の反対があったり、会長のお祖父様から条件を突きつけられたりと 相手がずれましたが、梨琉ちゃんの妄想も当たらずも無しなわけです。

すっかりしよげたレオナルトは、オリガに頭を下げました。

「すみません……。大した指輪買えなくて……」

「え？ 私、これ気に入ってるわよ。このピンクハートのデザイン、センス良いわ。それに」

オリガの手がブラウン管に触れます まるで、レオナルトの頬に触れているかのようです。

「決心してくれたのが、とても嬉しかったの。お祖父様の条件を飲んでくれるなんて。貴方つて結構頑固だから……」

「君が親や親族にかけられた圧力に比べたら、何てことないよ。それは僕が受ける痛みだったはずだったんだ」

「ううん……良いの、そんなこと」

「オリガ……」

レオナルトの手も、画面に映るオリガの頬に触れているような動作をします。

ゆっくりと二人、画面に顔を近づけていきました。

「来週だね。ようやく会える」

「迎えに来てね」

「勿論さ」

来週、日本にオリガが訪ねに来る予定です。

画面でのキスの我慢も後少しの辛抱。

「愛してるわ」

「僕もだよ」

瞳を閉じ、自分のキスを待つ彼女の姿……なんて綺麗なんだろう。そう思いながら唇を近付けます。

フニッ

冷たい画面の感触じゃなく

暖かいけど、モフモフしていきたくすぐったい……。

レオナルトが目を開けると、パソコン画面と自分との僅かな隙間をユウリが通りすぎていく所でした。

ミャー

（遊んでくれましたか？）

猫は細い隙間が大好きです。

突然出現した細い隙間にユウリは喜んで抜けようとしていたところに、レオナルトが顔を押し付けてきたものですから（本当はキス

なんですが)

ユウリは遊んでくれるのだと、その場で

コロリ

と仰向けになり、彼に向かって手足をバタつかせます。

ミヤー

(何して遊びましたか?)

手足のバタつかせ方が手を合わせたお願いポーズに見え、レオナルトは自分の失敗に加えて可笑しくなって声を出して笑ってしまいます。

その様子の一部始終を見ていたオリガは

「意外な子がライバル……?」

と、眉を下げました。

オリガさん。

ユウリはまだまだ小さい子猫です。

人間社会のしくみなんて無関係な猫です。

男女の複雑な感情なんてユウリにはまだまだ分かりません。

のんびり まったり

それでいて

興味あるものには全力投球。

そんな姿が何とも愛らしい猫達のうちの一匹なんです。

終

## 16話（後書き）

猫話なので続けられる内容ではありませんが、他の話の1000話記念として書いた話なので、一区切りとして終わりにしました。読んで下さってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7139/>

---

猫恋

2011年10月4日19時29分発行